

レジャー・カウンセリングの視点に関する考察

— McDowell のレジャー論に基づいて —

後藤由紀子*

A Study on Viewpoints of Leisure Counseling

— Based on McDowell's Leisure Research —

Yukiko GOTO

The aim of this paper is to clarify the viewpoints and the steps of leisure counseling. Leisure, being from the necessity, is not just the free time activity, contrasted with work or the childhood activity, but that it is done for its own sake and for the sake of the development of each character. So leisure, pleasureable in itself, builds the noble and honorable virtue in the character of a person to get better life. However contemporary society has forgotten the real value of leisure because of the industrial development. Our way of life has been used to being busy work-responsibility-dutifulness ideology, which is far from the nature of humanity.

Leisure counseling should be offered to facilitate an individual to build the humanistic lifestyle through leisure. Two points are important for leisure counseling. One is to understand the basic meaning of leisure, and the other to realize the lifestyle valued on leisure state of being. It seems to three steps should be offered for the counseling. First is to discuss with and around the clients about the meaning of time and leisure for the human life. Second step is to experience the feeling of joy of enjoying several leisure activities and deepen the meaning of leisure. And third step is to discuss again about how to actualize each lifestyle valued on leisure as whole life.

*エンゼル財団 (Angel Foundation)

受理：1992年11月8日

1. レジャーを取り巻く現代の状況

「夫が退職して終日家にいるようになったら、『もうーっ、うっとうしいわよ』『想像以上よ』と友人たちはくちぐちに言って私に覚悟を迫った」。(朝日新聞朝刊「ひととき」欄掲載1992年7月19日)定年退職の前に憂鬱がつのり、精神不安定になってしまう症状が増えているという話題を耳にする。平均寿命の延長・高齢社会の到来に、「レジャー」はどのように答えるべきか。

また、総理府が時系列で捉えている調査に「『心

の豊かさに重点をおいた生活』と『物の豊かさに重点をおいた生活』のどちらを重視したいか」という調査がある(総理府「国民生活に関する世論調査」)が、その結果を見ると、1978年を境に、「心の豊かさ」を重視する気持ちが「物の豊かさ」を重視する気持ちを上回り、その後の格差は増え続け、1990年の統計では「心の豊かさ」を重視する人が53.0%、「物の豊かさ」を重視するという人が30.8%となっている(図1)。では、「心の豊かさを重視した生活」の実現に、「レジャー」はどのように答えるべきか。

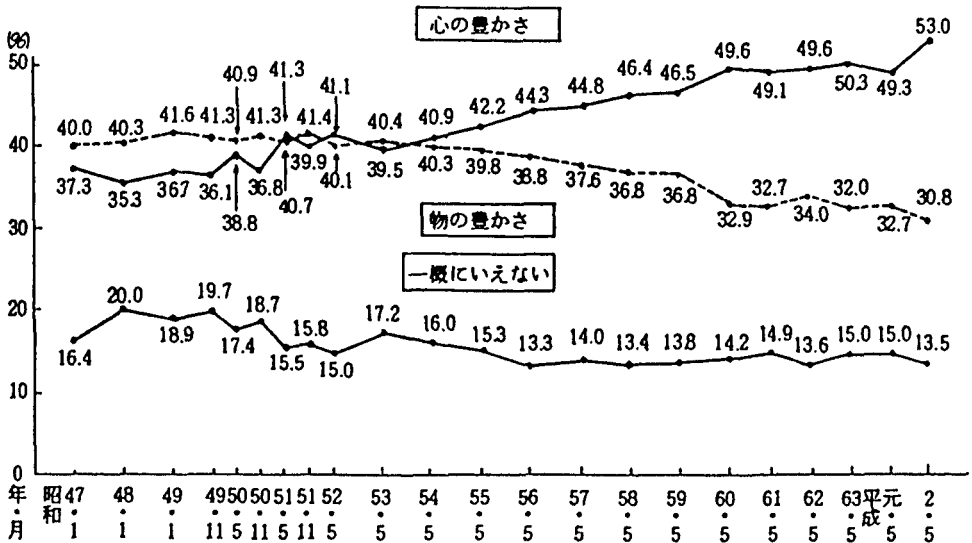


図1 心の豊かさか、物の豊かさか

出典：総理府広報室「世論調査(平成2年10月号)」

戦後の高度成長を支えたサラリーマン社会。それに伴って進行した核家族化。一流の仕事につくための学歴競争、子供の塾通いの一般化(図2)。女性の社会進出を環境的に可能にした家庭電化製品の充実。また、家族各人が自分自身の世界を作ることを促進した個室化や家電のパーソナル化。こうしたことを背景に、食事の時に家族がそろわない日が日常となったり、勤め人の起床在宅時間(家において起きている時間)が短くなるなど、家族の生活時刻が個別化し、家庭が昔ながらに持っていた生活環境・教育環境・文化環境が失われつつある¹⁾。では、「豊かなファミリーライフ」の回

復に、「レジャー」はどのように答えるべきか。

人類がこれまで経験したことのない「大衆レジャー社会」の到来²⁾である。これからの時代大切なのは、「人間にとって、本当の豊かさとは何か」という問いを、一人一人が持ち続ける気持ちであろう。自由時間の増大に伴い、また、自由な生活設計を可能にする経済環境・社会環境が整うに伴い、この社会に生きる人一人一人が、レジャーに対する理解を持つことが、必要とされている。レジャー・カウンセリングはこのような社会の要請を踏まえて、その意味と役割を模索すべきであろう。

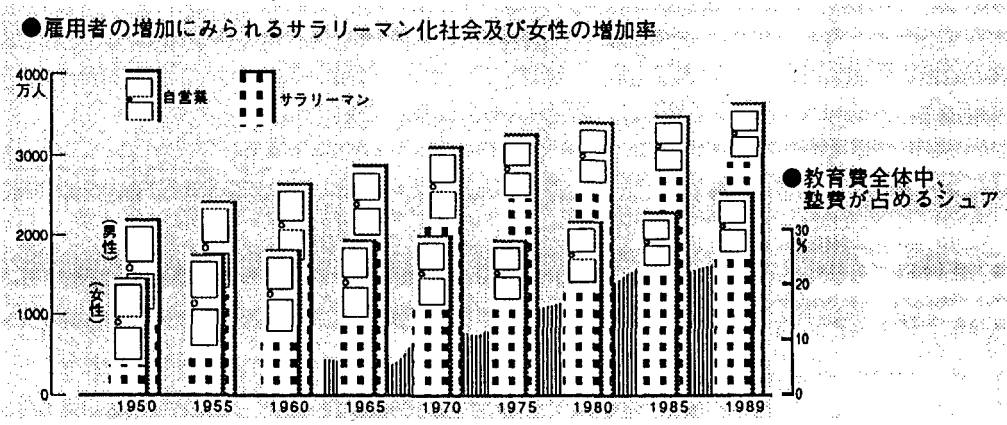


図2 サラリーマン社会化の進行

平成2年版「国民生活白書」記載

「雇用者の増加にみるサラリーマン社会化」

「昭和40年代に急上昇した進学率」等のデータを組み合わせて筆者が作成したもの。

2. 現代レジャーのテーマとレジャー・カウンセリングの意義

(1) McDowell のレジャー論から

レジャーの意味は様々な表現で捉えられてきた。それは、レジャーの持つ多様な要素の存在を示している。レジャーの意味を個々人の生活の中に反映させることがその目的のレジャー・カウンセリングでは、生活の質の向上(クオリティライフの充実)や、個々人の生きがい・幸福の充足にレジャーが果たす役割といった観点から、レジャーの意味を捉えていく必要がある。

ここでは、McDowell のレジャーに対する考察³⁾を深めつつ、現代の生活におけるレジャーの意味について整理してみたい。

McDowell は、「レジャーの状態」を際立たせるために、その質的差異を、「ワークの状態」との対比で説明している。その中で、「ワークの状態」(ワーク・イデオロギーを支配する考え方)を特徴づける言葉として、1. Time, 2. Effort, 3. Reason, 4. Boundedness, 5. Activity, の5つを、一方「レジャーの状態」(レジャー・イデオロギーを支配する考え方)を特徴づける言葉として、1. Timeless-ness, 2. Relaxa-

tion, 3. Intuition, 4. Unboundeness, 5. Experience の5つを対応させている。その一つは次のような考え方である。

① Time-Timelessness

現代の我々の日常生活は、時計の時間によって区切られ、構成されている。1日は24時間という時間感覚はすでに、体内にも埋め込まれており、我々は知らず知らずの内に、時計の時間に従って行動する。赤ちゃんの授乳も医師からの指導により、「〇時間おき」に決められ、お母さんも時計を見ながらミルクをやるというのが、一般的な現代の子育てだそうだが、このこと一つを取り上げてみても、すでに現代という社会に生まれた時から、「時計の時間」にあわせて行動する感覚がトレーニングされているのが現実のようだ。

「締切」の設定が、物事の達成率を高めるように、確かに生産力を高め、社会生活を円滑に運ぶためには、時計の時間は便利な装置ではある。問題は「ある一定の時間」に達成されたことの大きさが、その人の社会生活における能力の評価基準ともなる点である。もともと句切りのない時の流れに句読点をつけ、ある「時点」と「時点」の間の「時間」を量化したのは人間

の都合であり、その「時間」の間の生産量で人間の評価が決まる構造は、産業革命以降の、機械生産の量で経済活動が量られる社会の所産である。その結果、便利で物的に豊かな生活は実現したが、逆に時計の時間に縛られ、せかせかする生活が生まれ、現代の様々なストレスへとつながっている。

しかし、一人一人が本来心の中で感じる「時」の流れは、もっと、自由なものであろう。「一瞬」と感じる「時」の中に、「現在」と「過去」と「未来」が同時に存在することもある。「現在」という時の中に自分が入り込み、その中で永遠の長さを感じることもある。それぞれの人が持つ「時」の長さやボリューム感は本来、決して「時計」で計れるものではない。「時計の時間」に支配される現代社会への警鐘となった作品、ミヒャエル・エンデ『モモ』の中でも語られている。「人間の人生の長さは、時計の時間で計られるものではない。本当の時間の源は、一人一人の心の中にある。自分の心がどういう「時」を体験したかが、人生の長さや意味を決めるのだよ」とり。

レジャーの価値は、「時計」に縛られる時間枠を超え、人間が本来持つこの「心の時間」の豊かさを取り戻すことにある。従ってレジャーは、あるレジャー活動をする時間量やレジャー活動の種目にとらわれるのではなく、そこでどのような自分を感じているのかが中心テーマとなる。

② Effort-Relaxation

effortには、「努力」「骨折り」「尽力」という意味があるが、ここでいう effort とは、社会的な評価とか達成度といった外的な要因で動機づけられて遂行する努力のことである。

個人の好き嫌いを超え、ある一つの目標に向かって努力することは、生産性を高め、社会の活力を生むために必要なことである。近代の産業化社会は、そうした人間の育成を要請してきたともいえる。しかし、その「努力」は、社会の車輪となって活動し、社会的な評価を得るために、常に緊張し、ミスのないことを美徳化し

萎縮する人間を生み出す結果ともなった。

一方レジャーを支えるのは、relaxation の状態である。relaxation は、「弛緩」「休養」「息抜き」「くつろぎ」といった訳語からもわかるように、疲れた身心を休め、次の活動へのエネルギーを回復することをさす。それは「仕事」と「仕事」の間の潤滑油の役割となる単なる「休息」の状態ではなく、自己の心に耳を傾け、人間の存在や物事の本質に感じ入り、「生きる」ことの本質を見つめるゆとりを持った、受容的なゆったりとした心の状態である。このような「本質的なもの」や「自分自身が本当に自己を実現しているか」という問いかけに耳を傾けるには、大変努力がいる。しかしながら、それは「社会の車輪」となるための努力とは違い、「本当の自分」を探るための努力である。そこには、本質的な違いがある。

③ Reason-Intuition

学校の勉強は、間違えないように計算したり、覚えたりするトレーニングが多い。これも「ワーク・イデオロギー」に支配された社会の必要から生じた教育といえよう。

現代社会では、「理性」が重視される。理性的・合理的に段取り、無駄のないように動く。理性的な判断が組織を動かす。このような社会に慣れてしまうと、「きっちり」と、間違いなく、規則正しく、完璧に、スケジュール通り」コトを運ぶことが人間の出来・不出来を計るものさしとなる。しかしこれは、人間の持つ能力の一側面しか語っていない。

人間には、単に「理性」では説明できない「夢みる心」や「直感」がある。案外、この「夢想の中の自分」の方が、本人にとっては理屈にあっていない時もある。この「自由な発想」や「直感」の中に、大きな発見や無限の創造の力、あるいは、もの本質を推察する力が潜んでいる。「無」から「有」を生み出すエネルギーがある。

レジャーは、「仕事をうまく運ぶため」とか「自分の周りの人間関係をうまく保つため」といった外的要因に影響されることなく、自分が自分の思考の主になれる時間空間である。そこでの

自由な発想・直感で何かを感じ、それを統合化、総合化し、生活の様式・生き方全体に反映させていくことは、人間の生活を文化的にも高め、また心豊かな広がりやゆとりを持たせてくれる。

④ Boundedness-Unboundedness

機能的・合理的・能率的・組織的に動くことを良しとする社会では、「時間」と「理性」と「努力・忍耐」の概念に、自分自身をあわせることが要求される。その結果、「スケジュール」「慣例通り」「急いで」「間違いなく」といった言葉が、人々の生活を「拘束」することになる。

一方、レジャーは、色々な制約から解放された状態である。どこまでも拡散的に、又、重複合的な広がりや自由に、思考の遊び、心の遊びを楽しんでよい。社会的な制約を大切にしつつも、人間の心が本来持つ自由をどれほど享受できるかが大切である。

⑤ Activity-Experience

いくら「プロセスが大切だ」と言っても、実際の社会は、結果で評価されることが多い。特に仕事の世界では、ある活動の結果が評価対象となりやすい。そのため、「活動しないこと」は、「なまけていること」「非生産的であること」と同義語となり、「活動していること」が「仕事をし、成果をあげること」を表現することとなる。

「レジャー」はこのような「活動」や「結果」に意味があるのではない。「そこにどのような自分が存在しているか」「どのような自分を感じるのか」に重点がある。何をするかよりも、自分の心がどのような状態かが大切なのである。従って「レジャー活動」とか「レジャー時間」という言葉では「レジャー」を表現したことになる。

以上が McDowell のレジャーに関する考え方の整理である。現代の社会がいかに「ワーク・イデオロギー」に支配されているか、その中でレジャー本来の意味が失われ、人間生活が相当歪められているかがその論点となっている。

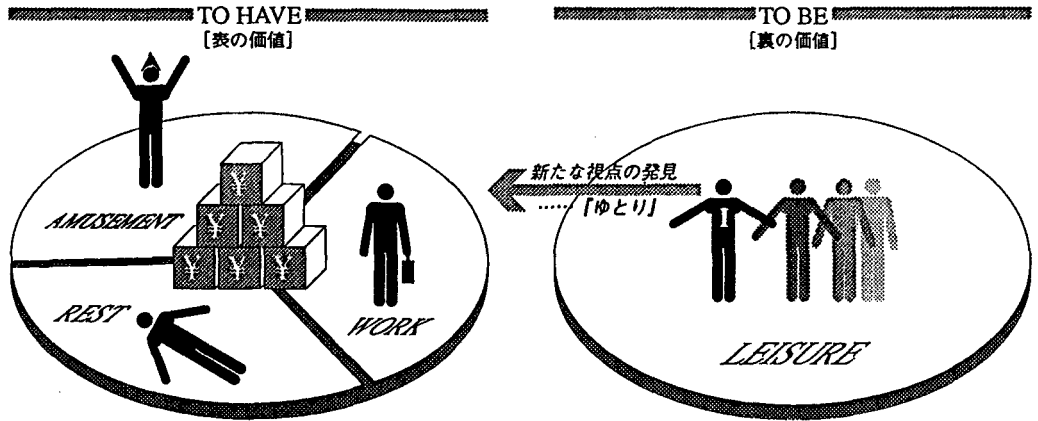
レジャーは、ギリシア語の *scholē* の概念に相当し、人間本来のあり方を高め実現するための時空間のことをさす。従って、「レジャーは文化の基礎」⁵⁾でもあり、「レジャーの中にこそ幸福はある。我々はレジャーを求めて働く」⁶⁾という関係になる。ところが「ワーク・イデオロギー」に支配される現代は、このレジャーの本来の意味が失われ、仕事・生産・消費の効率を高めるためのレジャー(余暇)となっている。つまり、近代に入っていつの間にかレジャーは、文化を深く楽しみ人間性を高めるために作用するものではなく、合理的・機械的な社会に適応した機能的な人間を元気よく輩出するために作用している、ということになる。しかし、これからのクオリティライフの実現には、もっとレジャー本来の意味を生活の中に取り入れる努力を積極的にすべきではないのか。McDowell の捉えた「ワーク・イデオロギー」と「レジャー・イデオロギー」の概念枠組みの中に、こうした考え方を読み取ることができる。これは、レジャー・カウンセリングのプログラム開発の根底にすべき問題意識であろう。

(2) 現代のレジャーのテーマとレジャー・カウンセリング

筆者は、レジャー・カウンセリング・プログラムの開発意義とそのテーマを明確にするために、McDowell の、ワークとレジャーの二項的捉え方を参考に⁷⁾、また、レジャー本来の意味に立ち帰りつつ、現代社会におけるレジャーのテーマを次のような図に表現してみた(図3)。

図の左側は、「ワーク・イデオロギー」の支配を示している。日常生活を営むためには、「仕事」の時間はどうしても必要だ。そして仕事で疲れた身体を休め、次の仕事・活動のエネルギーを回復するために、「休息」の時間や「気晴らし・娯楽」の時間を持つ。現代社会では「レジャー・余暇」は、この「仕事」と「仕事」の合間の時間をさす。この場合、「レジャー・余暇」は「仕事」や「活動」に従属するものという位置づけになる。仕事生活の車輪の一部ということになる。即ち、「レジャー活動」は、単なる「息抜き」

レジャーのテーマ
—TO BEの価値の発見—



© Y.Goto & K.Aihara 1991.

図3 レジャーのテーマ
(筆者作成による。)

的役割しか認められない。そしてこのサイクルにおいては、生産・消費の結果得られる「物的に豊かな生活」が人生の目標となる。

図の右側はレジャー本来の意味を表現している。それは、「仕事・生産・消費」のサイクルとは違った価値に支えられる。社会的制約や仕事の成果・結果を求められて行動する状態を離れ、リラックスした心で人間や文化・自然の本質に触れ、「自分」や「人間」「社会」に対して広い視野を持つ。その中で、「文化を創造する人間としての、本来あるべき自分の姿」を取り戻してゆく。そして、「社会生活における自分(仕事や日常生活で忙しく活動する自分)」と「本来あるべき自分の姿(真・善・美の価値に純粹に心ひかれるような人間の姿)」のあり方のバランスの大切さを取り戻す。この概念上で「レジャー活動」の意味を考えると、「自己本来の姿を取り戻し、人間に対する理解を深める」表現方法として、様々な文化活動や旅・スポーツを楽しむのだという位置づけになる。こうした時間を大切にすると、例えば、季節感を感じる生活を大切にしたり、日常の生活のささいなことにも恵みや喜びを感じるといった具合に日常生活への心の持ち方も次第に変わる。ここでは、「精神的に豊かな生活の実現」が生活の目標となる。

「ワーク・イデオロギー」に支配された社会の中での人間生活に大切なのは、図の右側的な意味を持つレジャーの価値をいかに取り戻すかということと、図の左側を支える「ワーク・イデオロギー」に従って生きる社会生活の部分と、「レジャーな状態」の中の自分とのバランスをいかにかはるかということではないか。図3を使っていえば、図の右側の楕円の価値をいかに認識させるかという視点と、図の左側の楕円と図の右側の楕円とを、いかにバランスさせたライフ・プランニングを行うかという視点である。人生には様々なライフ・ステージがあり、時期によっては、大きく図の左側のサイクルのための生活に偏る時期もあろうが、人生全体を見渡した時、図の左と右をバランスさせた生活の完成が求められるのではなかろうか。レジャーの価値を深めることと、それを日常の生活とバランスさせるという視点、この2つをいかに認識させるかが、レジャー・カウンセリングのプログラムを構成する基軸と考えたい⁸⁾。

3. レジャー・カウンセリングのステップと方法に関する視点の整理

(1) レジャー・カウンセリングのテーマとその第一ステップ

レジャー・カウンセリングでは、人間が、社会の車輪となるのではなく、人間本来のあり方から自分をしっかり見つめ、本質を見失わない生活を大切にすることへの気づきがテーマとなる。そのために、レジャー本来の意味を深く理解し、個々人の生活の中で、それぞれのやり方で、レジャー生活の充実をはかるよう動機づけしていく。従ってレジャー・カウンセリングは単に、「自由時間を作りなさい」とか「自由時間に何かをしなさい」といった指導をし、その人に向く適切な余暇活動の選択のアドバイスをするといった表層的なものではない。「自分本来のあり方」や「人間本来のあり方」に対する視点を豊かに、かつ、明確に持つことの面白さや意味深さに気づきを持たせ、そこから、自分や社会のあり方を客観的に見る「ゆとり」を持つことの意味に気づきを与えることが、大切な役割・目標となる。

図4に示すのは、筆者の考えるレジャー・カウンセリングのステップ図である(図4)。レジャー・カウンセリングにおいて大切なのは、いかに現代の社会が「ワーク・イデオロギー」に支配されており、日常の自分の生活がそれに慣らされているか、そしてそれは、人間の長い歴史に照らし合わせてみると、いかに異質なことであるか、さらにその歪みの是正にレジャーはどのような役割を果たしうるのかといった視点に気づきを持たせることである。そのような中から、レジャー本来の意味に戻って生活全体を見直してみるものの大切さに気づかせていく。その方法として、次のような視点から、各自が自分の日常生活を振り返って話しつつ、自分自身の生活や生き方を考える場を作ること、レジャー・カウンセリングの第一ステップと考えたい。

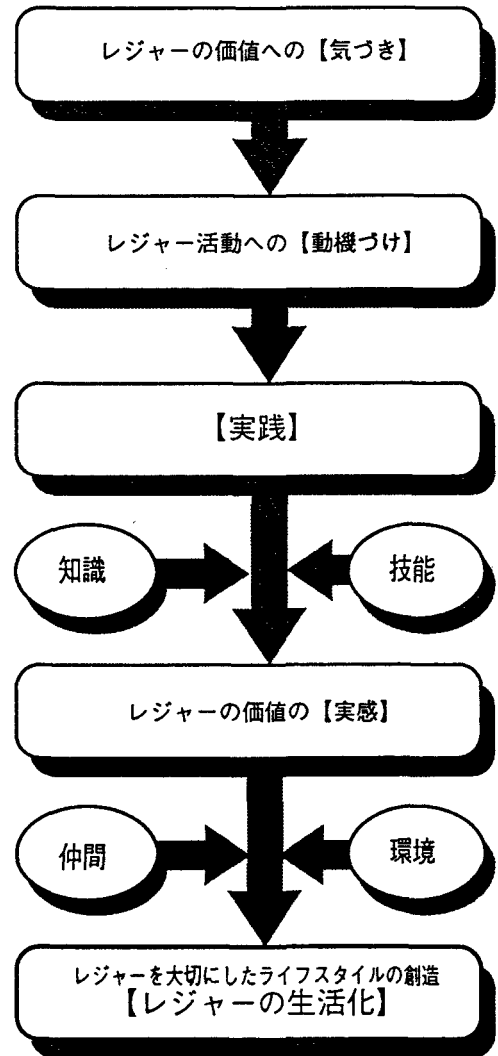


図4 レジャー・カウンセリングのステップ
(筆者作成による。)

①現在の日常生活の過ごし方を客観視してみる。

—一日の生活時間の中には、「生活必需の時間」「拘束時間(仕事時間)」「自由時間」の3つの時間がある。それぞれの時間が現在の生活の中で、どのような割合で存在しているのかを数量化し視覚化してみる。

—それぞれの時間をどのような心持ちで過ごしているのかを意識化してみる。家族とはどのように過ごしているだろうか。仕事の仲間とはどのように過ごしているだろうか。

大切な友人とはどのように過ごしているだろうか。自分と自分をとりまく人々への関わり方を、時間量と心理的充足度の観点から診断してみる。

②人生の「時間」について考える意識を持つ。

その中から、自分の「時」(心の時間)を大切にする意識を持つことの大切さを明確に意識づけてゆく。

— 一体現代に生きる人一人の生涯の持ち時間は平均どのくらいあるだろうか。全生涯でみたときに、「生活必需時間」「拘束時間」「自由時間」の割合は計算上、どんな具合になっているのか。こうして、生物的・社会的に生きる時間量を仮に設定することを通して、現在の自分が大切にすべきことを考えさせるきっかけとする。

— 個人個人の生きる時間量は、時計や暦では計れない心的質的な時間である(心の時間)。この「心の時間」の意味に焦点をあて、自分にとって大切な「心の時間」はどんな時間なのかを明確にしていく。具体的には、現在の生活の中で、自分にとって意味ある時間、自分が自分らしくなれる時間、自分が自然である時間とは、どういう時間なのか、逆に自然でない拘束された時間の拘束要素は何か深く考えてみる。

③自分史を通じて、自分の持つ価値観や生活意識が、どのような社会背景、生活環境、人間環境を通じて形成されてきたのかを客観視し、「自分にとって大切にしたい生き方」の視点を考えてみる。

— 人間が大切にしたい・大切にすべきと思う生き方は、時代・社会を超えて共通に存在するものだろうか。それとも、時代・社会の変遷に応じて変化するものなのだろうか。人間の創造した文化・社会を振り返り、変わるものと変わらない価値に焦点をあてて考察してみる。その中に現在の自分の生活をおき、また、これからの時代・社会のパラダイムを見据えた上で、自分の生き方を

支える考え方を明確にしてみる。

④レジャー本来の意味について考える。

— レジャーは単に息抜きの時間としてあるのではなく、本来は人間としてあるべき姿を享受するためにあった。それは「大切にしたい生き方・大切にすべき生き方」を高め、また表現する場である。また、そこでの生き生きとした時間、自分らしさを表現していく過程は、「心の時間」を充実させることとなり、日常の忙しいサイクルの生活へ、幅を持って関われるゆとりを与えることにもなる。こうしたレジャーライフの意味について、レジャーの原義に戻りながら、また現在の自分の自由時間の過ごし方と照らしあわせながら、考えてみる。

以上が、「レジャーの価値への『気づき』」をはかるためのステップの基本的枠組みである。図3の左側の楕円にある自分の生活を振り返りつつ、右側の楕円側に身をおいた時の自分の姿について「気づき」をはかるステップである。

(2) レジャーの価値を実感する機会の提供

人間・社会・自然に対する見方を豊かにし、自分の生き方に対する視野を高めるところにレジャー本来の価値があるとするならば、その複層的な価値を実感できるような体験を重ね合わせると、「レジャーの価値」を単なる概念ではなく、実感として理解することができる。それが「実践の楽しみ・広がり・深さ」を存分に味わうというステップである。図3の枠組に従えば、図の右側にある楕円の意味・価値を体験できるような機会の提供、即ち人間や自然・文化に対する見方を深め、自分の生活へも還元できるような機会の提供である。

例えば、スポーツ一つにしても、我々は本当にその価値を享受しているといえるだろうか。流行、ファッションを追っているだけではないか。また、「はやく」「上手に」「競いあう」「規律正しく」という価値が重視された学校体育の

影響で、単にスポーツ嫌いになっている人はいないか。もっと自然や人間の身体の法則から関わり方を深めたスポーツの楽しみ方の知識と技能があるのではないか。それを身につければ、スポーツ自体を楽しむライフスタイルも広がるし、自分自身のものの見方も広がるのではないか。一般にいうアウトドア・レジャーも、自然の中に人間がどのようなシンボル性を読み込んで、それがどのように表現されてきたのか、といった視点をもって関わると、様々な広がりがあるのでのではないか。このような問題意識のもとに、レジャー活動の実践を深く楽しんでもらうような機会を提供するのである。ここでは単にレジャー活動を楽しむノウハウを提供するのがその目的ではない。それぞれの領域の意味の深さを、人間観全体に結びつけて考え、一人一人の心豊かな生活設計に反映させるという意識が、この実践プログラムの背景にあることが大切である。

(3) レジャー・カウンセリングの最終目標

さて、レジャー本来の価値の認識を深めるきっかけをつかめば、それをどう日常生活の中に取り込むかが次のテーマとなる。図3の右側の楕円から、左側の楕円の中の自分の生活をもう一度振り返ってみるベクトルである。それが、「レジャーを大切にしたいライフスタイルの創造へむけて」というステップである。

現在の自分の生活を取り巻く仕事の環境・家庭の環境・経済環境等は厳然としてある。その現状は認めつつ、レジャーに対する再認識や人生80年時代の時間の価値を考えることを通して、主体的・自律的に自分の生活を精神的に豊かなものに組み立てていく方向性について意識化する。人間や社会の歴史に照らし合わせた上で、自分が大切にすべき生き方を認識し、それを実現する心豊かな「ゆとり」ある生活設計を意識的に展望してみる。そしてそうした生活の実現へ向けて、可能な限り、自分を取り巻く環境への意識の組替えを動機づける。ここでは、自分を取り巻く環境（ここでいう環境とは、自分の生活時間の実態、人間関係の広がり、さら

に住居周辺の物理的環境といった全体的な状況をさす)を具体的にあげてみて、その環境に対してどのような働きかけを具体的にすべきかを話してもらおうという方法が有効となろう。

上記のような視点が、机上の空論や「べき論」で終わるのではなく、「自分の問題」として認識できるよう、「自分のこと」や「人間本来のあり方についての自分の考え」を率直に述べられるような場の設定が必要になる。身近な話題で、自分の生活観の深層にまで触れることができ、また、身近な視点の中から、人間や文化の深さや面白さに触れることができるようにする機会の提供、それがレジャー・カウンセリングの役割であると捉えたい。

図5に示すのは、筆者の考えるレジャー・カウンセリング・プログラムの展開イメージである。レジャー・カウンセリングは、単にレジャー活動を楽しむノウハウを提供する機会としてあるのではなく、常に日常生活全体を考えつつレジャーの意味を深めさせていくものである。こ

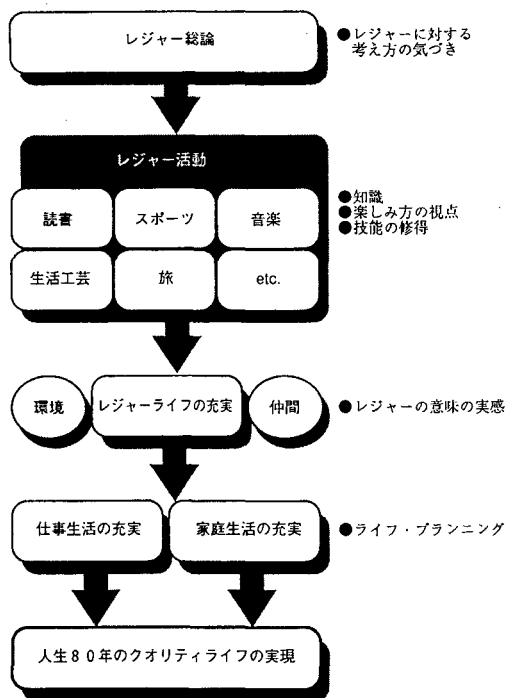


図5 レジャー・カウンセリングの展開 (筆者作成による。)

うしたことからも、レジャー・カウンセリングは「人間」や「文化」「社会」に対する多側面からの深い理解を背景に、そのステップと方法を構築していかなければならないであろう。

〈引用文献及び補注〉

- 1) 平成2年度版「国民生活白書—人にやさしい豊かな社会—」(経済企画庁編)にこの主旨は記載されている。
- 2) 「大衆レジャー化社会」は1960年頃、自由時間増大の社会に対する警鐘として、アメリカの社会学者を中心に提唱された言葉である。
- 3) C. Forrest McDowell: Leisure: Consciousness, Well-being, and Counseling., Dowd, E. T. (ed): Leisure Counseling. pp.5-51, Thomas, 1984. より。レジャー・カウンセリングに関して総説された書物の一つである。
- 4) Ende, M. (大島かおり訳): モモ, 岩波書店, 1973.
- 5) Pieper, J: Leisure-The Basis of Culture. New York, A Mentor-Omega Book, 1952.
- 6) Aristotle (H.Rackham): Nicomachean Ethics, X 1177b. Harvard Heinemann, 1926.
- 7) ワークとレジャーを二項対立的に捉えるべきかは議論の余地があるが、現時点においては、レジャーの意味を理解する一つの有効な切口と考えた。
- 8) レジャー・カウンセリングを考察する際、「レジャー」をどう捉えるかという面からのアプローチと「カウンセリング」をどう捉えるかという面からのアプローチが必要であろう。本項においては、McDowellのレジャーの捉え方の枠組みをもとにレジャー・カウンセリングの意義を考察する面しか扱っていない。それは、現代社会におけるレジャーのテーマを明示する一つの捉え方として参考になると考えたからである。レジャー自身が持つ多面的価値をどう整理するか、またカウンセリング全体の中で、レジャー・カウンセリングをどう位置づけるかといった面からの考察は今後の課題となろう。